

オリンピックレガシーに思う

山田信幸

玉川学園・玉川大学
健康・スポーツ科学研究紀要
第17号

オリンピックレガシーに思う

山田 信幸*

昨夏はリオデジャネイロオリンピックが行われ、日本選手団はいくつものメダルを獲得し、私たちに多くの歓喜をもたらした。中でもウサインボルトを擁するジャマイカや陸上大国アメリカに正々堂々と渡り合い、銀メダルを獲得した陸上短距離選手は今までとは違う日本人の持つ可能性を示してくれた。

「走る」という最も基本的といえる種目において、日本人が世界と対等に闘えたことへの驚きや喜びとともに、トップアスリートの身体的な向上に目を瞠らされた。また、優れたバトンパスの技術という新たな側面を世界中に知らしめたことでも興味深い。

そして 2020 年東京オリンピックへの準備が本格的に始まろうとしている。1964 年以來の夏季オリンピックに国民から大きな期待が寄せられている。しかし、同時に様々な問題が取り上げられている。特に施設整備に関する話題は、巨額のお金の話と相まってマイナスのイメージもつきまとっている。

オリンピック総費用は 3 兆円と試算され、施設整備に何千億円もかかる。大会後におこなう仮設施設の整備費だけで 2800 億円とも言われている。「オリンピックレガシー」という言葉が前面に押し出され「アスリートファースト」が声高に叫ばれることで、巨大施設の整備は当然行われるべきことになっている。また、試算し直した際に提示される金額の、当初予定とあまりにもかけ離れた数字をみるにつけ、どのような計画で進められたのか疑問がわく。

先日の新聞記事に小さく「長野冬季五輪そり施設停止へ」という記事が載った。長野冬季オリンピック（1998 年）のボブスレー・リュージュ会場である長野市営そり施設「スパイラル」を 2018 年度から稼働停止する、という有識者による委員会の結論を報じたものである。稼働停止の理由は、101 億円かけて作られたこの施設の年間維持費が約 2 億 2000 万円かかるからという。国の負担は 1 億円とのことで自治体が残りを負担するにはあまりにもコストがかかり過ぎる。したがって、稼働停止もやむを得ないと

思える。しかし、2020 年東京オリンピックに向けた整備費見直しの金額をみたとき、その“誤差”の範囲で「スパイラル」を存続する費用が捻出できるのでは？と素人ながらに考えてしまう。いずれにしろ大会後に目を向けた計画がないことが「スパイラル」の現状を生んでいるのではないだろうか？ちなみに 1972 年札幌オリンピックボブスレー会場（北海道手稲）も 2000 年に閉鎖となっている。

2024 夏季五輪招致活動ではブタペスト（ハンガリー）が活動からの撤退を表明し、ローマ（イタリア）、ハンブルグ（ドイツ）、ボストン（アメリカ）なども取り下げた。招致レースはロサンゼルス（アメリカ）とパリ（フランス）の一騎打ちとなる。世界的にオリンピック開催に対して懐疑的な見方が広がる。

1964 年の東京オリンピックは、日本国民にスポーツに対する興味を喚起し、体力向上、健康維持に対する意識を高めた。これも「オリンピックレガシー」のひとつである。立派な施設いわゆる「箱もの」だけにとらわれない考え方をしていきたい。

このほど示された改訂学習指導要領においてはオリンピック・パラリンピック教育についてはその意義や価値を学修することになっている。また、生涯スポーツの観点から、運動の習慣化を目指すことが引き続き謳われている。スポーツ庁は、週 1 回以上スポーツをする成人を 65% まで増やすことを目指している。しかし同庁の調査に拠れば実態は約 40% にとどまっている。スポーツが人々の生活の中に浸透しているとはいえない。また、子どもたちの体力向上は依然として体育に課せられた課題の中心であり、学校の中や家庭であるいは地域でスポーツに親しむ環境づくりが必要である。そのきっかけがオリンピックであるようにしたい。

2020 東京オリンピックは、私たちにどのような「レガシー」を残してくれるのだろうか。

参考：朝日新聞（2017.2 月 17. 18. 24, 3 月 1 日）